

アジア都市文化学専攻

OSAKA CITY UNIVERSITY
Graduate School of Literature and Human Sciences

アジア都市文化学専攻

<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/asia>

専攻紹介

アジア都市文化学専攻は、2001年に大学院のみの専攻として設置された。本専攻は、アジアとの結びつきの深い大阪を拠点に、都市という視点を通じてアジアの諸文化にアプローチし、その独自性や多様性を解明することをめざしている。アジアの諸文化、とりわけ都市文化の現状と特性、その形成過程、さらに今後の可能性について、人文諸科学の成果を基礎に学際的、総合的、比較文化的な観点から考究しようとする本専攻は、従来政治、経済分野に偏りがちであったアジア理解を深化させ、アジア諸地域との真の意味での相互理解や文化的共存を志向するものである。

教員スタッフの専門は哲学・文学・文化人類学・芸術学・文化研究・観光文化論など多岐に渡り、地域的には東アジア（日本・韓国・中国など）および東南アジア（インドネシア・マレーシアなど）を主たる研究のフィールドとしている。スタッフはそれぞれの専門分野の特性を生かしながら、思想、制度、伝統文化、多民族共生、宗教、観光、環境、芸術、ポピュラー文化など、アジアの文化的諸事象についての教育、研究に従事している。

教育方針

本専攻では、学生の興味や関心を学問の対象へと昇華させるべく、個々の学生にたいするきめ細かな対応を心がけている。具体的には、教員それぞれの専門分野にかんする基礎的文献研究はいうまでもなく、各学生の研究テーマにあわせたフィールドワークも重視して指導をおこなっている。そのさい多分野多地域の研究者が在籍することの利点を活かし、学生とは専門分野、対象地域を異にする教員を副指導担当として配することで、学生が自らの専門分野や対象地域を越えた学際的、比較論的な視点を身につけることに力を入れている。

具体的な指導内容としては、まず前期博士課程1年次にはアジア都市文化について幅広く学ばせるとともに自らの研究テーマや研究手法の明確化をはからせる。前期博士課程2年次には修士論文の完成を目指して研究テーマを絞り込ませた上で、問題設定、資料収集、資料分析と解釈、論文作成という一連の研究過程を細かく指導する。後期博士課程においては、専門研究者としての自主性を最大限尊重しつつも、博士論文完成に向けての方向付けや研究の各段階における支援をおこなう。同時に学会発表や学会誌、専門誌への投稿を促し、近い将来専門研究者あるいは高度な専門性を身につけた職業人として真に自立するための準備をさせる。

本専攻は、大学内に閉じた従来型の知にとどまらず、研鑽を通じて得た知見を社会の現場で生かすための実践知を重視し、研究と実践を結びつけようとする志向を持つ学生を積極的に受け入れている。それもあって本専攻には常に複数の社会人学生や留学生が在籍しており、彼／彼女らを軸に大学と社会の交流、さらには国際的な交流が日常的に実現されている。本専攻は学部に対応するコースをもたないため、必然的に所属学生は他学部・他大学出身者がほとんどであることもあって、専攻としてつねに外に開かれた自由な気風の醸成に努めている。

所属教員

中川 眞

(サウンドスケープ論、民族音楽学、アートマネジメント論)

野崎 充彦

(朝鮮古典文学、伝統文化論、民間信仰)

多和田 裕司

(文化人類学、東南アジア地域研究、文化消費論)

増田 聡

(ポピュラー音楽学、都市大衆文化研究、文化所有論)

新任教員

(2015年10月着任予定)

天野 景太

(観光学、社会学、都市社会文化論)

なか がわ
中川

しん
眞教授

専門分野 音楽学

最終学歴 大阪大学大学院文学研究科

学位 博士(芸術文化)

研究内容

私の研究には一貫性がありません。最も古いのは奈良県の盆踊り研究で、既に30年以上にわたっています。次に古いのがサウンドスケープ研究で、日本やアジアを対象とした音響文化史に取り組んできました。並行して東南アジア、特にインドネシアの音楽と儀礼の研究を行い、演奏も活発に行っています。21世紀になってからは現代アートの一形態であるサウンドアートの研究に移行するとともに、近年では被災地や貧困地域などにおける社会包摂的なアーツマネジメントに関する研究にも注力しています。

主要業績

- [著書] ■『平安京 音の宇宙』(平凡社、1992。サントリー学芸賞、京都音楽賞、小泉文夫音楽賞を受賞。ドイツ語版は Merve Verlag (2000) インドネシア語版は Yayasan Obor Indonesia (2000)
■『サウンドアートのトポス』(昭和堂、2007)
■『これからのアートマネジメント』(フィルムアート社、2011、共編著)
■『アートの力』(和泉書院、2013)
■小説『サワサワ』(求龍堂、2003)

メッセージ・教育方針

どこに行っても生き延び、他者のために働くこのできるタフな人間力をもった人を育てるのが私の教育方針です。過度に教員に依存することなく、独立自尊の精神で自分を磨いてください。自立と共助がモットーです。

の ざき みつ ひこ
野崎 充彦 教授

専門分野 韓国伝統文化論

最終学歴 大阪市立大学大学院文学研究科

学位 博士(文学)

研究内容

1. 朝鮮古典文学、なかでも人物伝記的な作品を中心に歴史と人物を読み解く。
2. 両班と呼ばれた士大夫らの文集を通じ、文化的ナショナリズムの形成過程を追う。
3. 民間信仰(風水・シャーマニズムなど)の視点から民族文化観の諸相を探る。
4. 映画などの映像資料を駆使し、伝統文化と現代社会との関わりを考察する。

主要業績

- [著書] ■『韓国の古典小説』(共著 ペリかん社 2008年)
■『コリアの不思議世界』(平凡社 2003年)
[訳書] ■『洪吉童伝』(平凡社 東洋文庫 2010年)
■『青丘野談』(平凡社 東洋文庫 2000年)
[論文] ■『風水マスターを通じてみる韓国風水の特質』(『術の思想』風響社 2013年)

メッセージ・教育方針

「理解しなくても愛することはできるが、愛することなしには理解できないものがある」私の座右の銘です。
独りよがりな好き嫌いに陥ることなく、また、いわゆる「客観的」な分析で事足りれりとするのでもなく、常に現代に生きる人間としての問いかけを持ち続けながら対象に接することを目指しています。

たわだひろし
多和田裕司 教授

専門分野 文化人類学

最終学歴 大阪大学大学院人間科学研究科 学位 博士(人間科学)

研究内容

文化人類学の立場から東南アジア地域研究、とくにマレーシアを中心とした研究をおこなっている。現在取り組んでいる研究課題は、グローバル化、国民国家体制、消費社会の進展等の特徴とする現代社会における宗教の(再)定式化について、とくにイスラームを対象としてあきらかにすることにある。イスラーム(および諸宗教)に内在する理念や教義は、現代社会において「普遍的」とされる価値とどのように切り結んでいるのであろうか。理論的検討およびフィールドワークを通して、具体的な宗教実践にあらわれる両者のダイナミズムをとらえたい。

主要業績

- [著書] ■『マレー・イスラームの人類学』(ナカニシヤ出版、2005)
 ■『イスラーム社会における世俗化、世俗主義、政教関係』(上智大学アジア文化研究所、2013、共編著)
 [論文] ■“Coexistence of Religions in Contemporary Malaysia,” *Urban Culture Research vol.2 - Coexistence in the Multicultural City* - (UCRC, 2004)
 ■「文化を売る: マレーシアにおけるふたつのソフトパワーをめぐる」(『人文研究』第64巻、2013)
 ■「観光の時代におけるイスラーム: マレーシアの事例から」(『人文研究』第65巻、2014)

メッセージ・教育方針

研究分野からフィールド調査中心の指導と思われるかもしれないが、指導の基本は読む力の養成にしている。学術的な文章を読みこなせない者に学術論文が書けるはずがない。大学院生であるかぎり自分の研究に関する文献だけではなく(それは自身で当然やっておくべきことである)、専攻分野の古典的著作は一通り読んでほしい。

ますだ さとし
増田 聡 准教授

専門分野 音楽学・メディア論

最終学歴 大阪大学大学院文学研究科 学位 博士(文学)

研究内容

ポピュラー音楽研究を中心とした大衆文化研究。複製メディア技術の発展と普及により生じてきた新たな音楽文化の生産と受容の諸々について、主に美学的な関心に基づいてアプローチしています。録音メディアと作品概念、創作行為と作者性、剽窃・盗作と間テクスト性、人工音声キャラクターの主体性、著作権制度と音楽実践の相関などをこれまでテーマとしてきました。現在は、都市空間における音楽がもつ場所性について関心があり、携帯音響機器やBGM、ご当地ソングなどについての研究を極めてゆっくりと進めています。

主要業績

- [著書] ■『聴衆をつくる—音楽批評の解体文法』(青土社、2006)
 ■『その音楽の〈作者〉とは誰か—リミックス・産業・著作権』(みすず書房、2005)
 ■『音楽未来形—デジタル時代の音楽文化のゆくえ』(洋泉社、2005、谷口文和との共著)
 [論文] ■「真似・パクリ・著作権—模倣と取奪のあいだにあるもの」(『コモンズと文化—文化は誰のものか』(東京堂出版、2010、山田奨治編)
 ■「データベース、パクリ、初音ミク」(『思想地図』(Vol.1【特集:日本】、NHK出版、2008、東浩紀・北田暁大編)

メッセージ・教育方針

大学は「勉強するため」の場所ではありません、と言うとほとんどの学生は解せない顔をします。しかし、その中に「なるほど」と合点した表情をうかべる学生がときおり存在し、そのような学生がやがて研究者の道を進んでいくのを幾人も見てきました。「大学は勉強するところではない」のであれば何をするといいのでしょうか。ひとつ考えてみてください。

研究内容

「観光」を社会現象として捉え、現代観光の社会・文化的な特質を、主に社会的な視点から読み解くことを課題としています。具体的には、相互に関連しあう以下の4つのテーマ、①アーバン・ツーリズムの総合的研究、②都市や地域における人々や文化の結節点（駅や盛り場空間など）の生成と展開に関する研究、③ニュー・ツーリズムの観光文化論、④観光行動におけるメディア・コミュニケーションの役割に関する研究、について、国際比較を念頭に置きつつ、日本をフィールドとしながら探求しています。

主要業績

- [論文] ■「景観展望観光の歴史とその特色：日本の大都市におけるタワーツーリズムの展開を中心として」『日本観光学会誌』(第48号、2007)
- 「駅文化の国際比較研究 序説：大都市ターミナル駅における駅文化の展開を手がかりとして」『中央大学社会科学研究所年報』(第12号、2008)
- 「携帯位置情報ゲームと観光経験：ゲーミング・ツーリズムの実態と展望」『論叢 国際関係学部篇』(第16巻67号、2011)
- 「盛り場空間の社会生態学：アーバニズムの下位文化理論から捉えた東京・渋谷」『国際関係学研究』(第24号、2014)

メッセージ・教育方針

種をまかず、肥料をやらなければ美味しい果実は実りません。大学(院)での学びも同じで、果実だけエレガントにいただく、つまり出来合いの理論や学説をつまみ食いするだけではなく、ものごとを一から地道に考え抜く実践こそが、迫力を持った研究成果を導きます。私も学生の皆さんとともに思考し、試行錯誤する姿勢をもって授業に臨みたいと考えています。

専修の特色

教室行事

教育、研究にかんする教室行事として、教員、学生全員が参加する総合ゼミを月に2回程度の割合で開催している。ここでは前期博士課程院生、後期博士課程院生の修士論文、博士論文作成のための研究発表をもとに、教員、学生による自由な討議がおこな

われる。

授業以外の活動としては、院生による研究会（アジア都市文化学研究会）が定期的で開催され、基本文献の輪読や研究発表などをおこなっている。

その他の特色

本専攻の特色として、社会人学生を積極的に受け入れてきたことが挙げられる。本専攻は他専攻に先駆けて前期博士課程、後期博士課程の両方での社会人学生の受け入れを開始し、これまでに

地方公務員、教員、NPO 法人職員や、都市の計画・開発、アートマネジメント、マスメディア等の分野で活躍する社会人学生にたいして、専門性や学際性を高めるべく努めてきた。

博士論文・修士論文題目

博士論文

- ▶ 「日本コンベンション産業の歴史の変遷とその課題」
- ▶ 「中国人のサービス意識に関する研究 —— ホテル業のサービスを上げて ——」

修士論文

- ▶ 「中国・成都市における都市観光の課題と対策 —— 「経済型観光」から「文化交流型観光」へ ——」
- ▶ 「プーケットにおけるアート・プロジェクトの実践と記録 —— 地域コミュニティにおけるアートマネジメント ——」
- ▶ 「都市と映画祭 —— 「大阪アジア映画祭」を事例に ——」
- ▶ 「中国都市部における消費主義の指向性についての考察 —— 二都市の大学生の日常消費調査を中心に ——」
- ▶ 「マイノリティの居住空間から集合的な記憶の場所へ —— 在日コリアンコミュニティ・ウトロ地区を事例として ——」
- ▶ 「ケアの現場とアートをつなぐマネジメントに関する研究」
- ▶ 「観光と地域文化の創出 —— 高野山におけるふたつの祭りを中心として ——」
- ▶ 「異文化イメージの形成と変容 —— ベトナム修学旅行における高校生の異文化体験を事例として ——」
- ▶ 「「近代建築の価値」の発見と変遷 —— 大阪市船場地区を例に ——」
- ▶ 「訪日中国人観光客誘致の問題点に関して —— 大阪のインバウンド観光を事例として ——」
- ▶ 「「中国風音楽」とは何か —— 2000年以降の音楽実践を中心に ——」
- ▶ 「マレーシアにおける「多文化主義」 —— 世界文化遺産都市、マラッカとジョージタウンからの視点 ——」

進路

前期博士課程修了

一般企業（旅行代理店、環境コンサルティング企業、不動産関連企業、メーカーなど）、教員（中学校、高等学校）、官公庁（地方公務員、公益財団法人、在日本外国大使館、NPO 法人など）、大学院博士課程（本学文学研究科、本学経営学研究科）など

後期博士課程修了（単位取得退学者も含む）

大学研究者（阪南大学、東京成徳大学、（中国）廈門大学、大阪芸術大学短期大学部）、研究員（本学都市文化研究センター、本学都市研究プラザ）、教員（中学校）など

在学生・修了生の声

在学生

財田 啓史 さん

前期博士課程

私たちの専攻の魅力は、研究分野の幅広さにあると思います。研究報告会（総合ゼミ）で様々な分野の新たな知見、見かた、考え方を得られるのは、私たちの専攻ならではのだと思います。研究対象へのアプローチも様々で、多くがそれぞれのフィールドに出掛けて、フィールドワークを行っているということが特徴です。講義の中でも調査に出かけることがあります。私自身も、マレーシアでの調査、研究活動を行い、そこで得られるより「リアル」な知見・経験・感触・感覚におもしろさを感じています。また、ふだんの学生生活で留学生と共に過ごしているため、毎日良い刺激を受けながら学んでいます。

在学生

王 静 さん

後期博士課程

私がこの専攻を選んだのは、現代社会が直面する課題について従来の知のありかたを越えたアジア的な知の探求を通して考察していきたい、という理想を抱えていたからです。しかし、いまだひとつの学問分野さえ深く研鑽することは難しく、いくつもの領域を自由自在に横断できるようになるのは遠い夢かもしれません。そんな学問の峻険さと奥深さに戸惑いながらも、留学生として長く外国で研究を続けることに辛さを感じないのは、何より厳しく、そして優しく接して下さる先生方の応援や、ともに学ぶ他の院生たちの存在があるからだと思います。ここは、私と私の理想を育ててくれる場所だと実感しています。

修了生

大阪府立貝塚高等学校教員

河本 郁子 さん

前期博士課程

私は現在、高校の教員として働いています。教科指導等において大学院で学んだ学識が役立つのはもちろんですが、一番今の仕事に影響を与えたものは様々な人とのかわりだと思っています。思えば前期博士課程では2年という長期間にわたって研究テーマを追求するわけですから、専攻の先生や院生との意見交換が何よりも大切でした。特に私の所属していた専攻は様々な地域にルーツのある方が多く、大いに刺激されました。この経験は自分自身の見識を広げ、多角的に問題にアプローチする面白さを教えてくれた気がします。今は「こんな考え方や見方もある」と若い世代に少しでも伝えることができたらと思い、教壇に立つ毎日を送っています。